

発達検査と対人援助学

②③ AIの問いから考える発達相談 その③

大谷多加志

62号から連続で、MicrosoftのAIツールであるCopilotに『現代の幼児期の発達障害のアセスメントに関する課題点を挙げ、それらに対する改善の方針を、①わずかな改善につながる水準、②具体的改善につながる水準、③中長期的、組織的に取り組むメタレベルの水準でそれぞれ提案してください。』と指示し、そこで提示された問いについて考える、ということをシリーズ的に行ってきました。今号がその3回シリーズの最終回になります。今回取り上げるのは最後の「抽象的・理論的な問い」の回答についてです。3つの問いが提示されていますので、順に考えてみましょう。

い。』と指示し、そこで提示された問いについて考える、ということをシリーズ的に行ってきました。今号がその3回シリーズの最終回になります。今回取り上げるのは最後の「抽象的・理論的な問い」の回答についてです。3つの問いが提示されていますので、順に考えてみましょう。

🧠 抽象的・理論的な問い(発達理論・制度設計に関する疑問)

- KSPD2020の構成概念は、現代の発達理論(例:動的システム理論、文化歴史的発達理論)と整合的か?

→ 検査の理論的背景と発達観の一致性。

- KSPD2020は、文化的・社会的背景の異なる子ども(例:外国籍児、多言語環境)に対してどのような限界を持つか?

→ アセスメントの文化的妥当性と限界。

- 発達検査という枠組み自体が、子どもの多様な発達のあり方を規定・制限してしまう可能性はないか?

→ アセスメントの倫理的・哲学的問い。

現代の発達理論との整合

まずこれらの問いの内容を精査するところから始めます。AIが述べた「動的システム理論や文化歴史的発達理論」についてですが、これをいったん『ヴィゴツキーの社会的構成主義やエスター・テーレンらのダイナミックシステム・アプローチなどの発達理論に準拠しているのか』という問いであると整理してみました。これらの発達理論

の内容をものすごくザックリとまとめてみると、子どもの発達について、個人に内在された仕組みが決まったタイミング(年齢)で発現するという、古典的な発達理論で捉えるのではなく(ピアジェはKey-ageという概念を用いていました)、周りにいる他者や環境、さらに社会や文化との相互作用の中で子どもの発達を捉えようとしている理論であると言えるかと思います(かなり乱暴

ですが)。

さて、このような発達理論の考え方と K 式発達検査が整合するかという問いに対してどう答えることになるのか考えてみましたが、これはなかなか難しい問題であるように思います。まずこれらの発達理論が指摘するように、子どもの発達はその生物学的な機序だけでなく、環境や他者との関わりの中で進んでいきます。つまり子どもの発達自体が、社会や文化を含みこんでいます。K 式発達検査も定期的に改訂を行うことでその時代と環境における子どもの発達を捉えるように調整されていますし、検査項目の中には文化的な要素も少なからず含まれます。例えば子どもの語彙を評価する課題において、今の時代、今の文化において子どもが理解しているであろう語彙が選定され、項目に設定されているわけです。

一方で、検査構造自体は、課題(検査用具や教示)を提示し、それに対する子どもの反応を観察するという、古典的な時代から変わらない評価方法を用いています。子どもの反応はあくまでも「検査場面」における反応であり、検査を実施した時点では、特に子どもの生活環境などが考慮されているわけではありません。むしろ、検査結果の解釈や報告書を作成する際に、子どもの生活環境や社会、文化的背景と結び付けて子どもの反応を理解し、その結果を保護者や関係者に伝えていくという形で、重視すべき文脈になっているように思います。

異なる社会文化的背景の子どもに対する限界

次は 2 つ目の問いについて考えます。「異なる社会文化的背景を持つ子ども」はかな

り幅広い意味を持つと思われますので、ここでは AI が例に挙げている「外国籍の子どもや多言語環境における子ども」への適用について、アセスメントの妥当性や限界という観点で考えてみます。

この連載の中でも何度か触れていますが、発達検査は「標準化」という手順を経て公刊されます。つまり、検査を使用する国や地域、時代に合わせて基準値が調整されています。そのため、外国籍に子どもなど、異なる文化圏の子どもの評価に用いることは基本的に難しいというのがまず前提となります(外国籍だけけれど日本で長く暮らし、日本語でのコミュニケーションにも支障がない、などの場合は除きます)。時には「通訳を介して検査を実施してよいか」という質問がある場合がありますが、これは一段と難しいこととなります。検査の教示(指示)は子どもの年齢に応じて用いる言葉が選別されており、項目ごとに「幼児語を使ってよいか」、「教示だけでわからない場合に指さしや例示などを行ってよいか」なども厳密に決められています。一般的に通訳の場合は、より伝わりやすい表現を意図的にするでしょうし、日本語での表現とぴったり一致する語があるとも限らないため、標準化された基準通りの手順で実施することはおよそ不可能であると思われます。行政における手続き上、どうしても検査の数値的な結果が必要であるなど、様々な事情があるのだとは思いますが、少なくとも、このような状況であれば基本的には無理をして発達検査を実施するより、別の手立てを探る方が適当と言えるでしょう。

発達検査という枠組みがもたらす制限

いよいよ最後の『発達検査という枠組み自体が子どもの多様な発達のあり方を規定・制限してしまう可能性はないか?』という問いを取り上げます。最初にAIのコメントを見た時から、この問いが一番興味深く、検討する意義があると感じました。まずこの問いに対する回答を行うとすれば、それは「ある」でしょう。

発達検査の項目の配置は、いわば子どもたちの標準的な発達のプロセスを示したものであり、だからこそ子どもの発達経過を見る目安として使えたりもするわけです。一方で、AIが危惧したような、いくつかの問題もあります。ひとつは必ずしも発達のすべての側面が網羅されているわけではないこと、もうひとつはわかりやすく発達のプロセスが示されていることの弊害です。順に考えてみます。

まずひとつめです。発達検査は子どものあらゆる発達の側面を網羅する構造にはなっていません。特に就学前の幼児期の検査課題は、ビネーの検査項目から取り入れたものも多く、学校での学習につながるような準備性が確保されているか（一定の巧緻性や概念理解、数理解、指示理解が可能か）という観点が重視されています。この検査構造により、子どもの発達をみる視点が狭められる恐れは十分にあると思われま

す。ふたつめの「発達のプロセスが示されることの弊害」です。プロセスが示されているという検査構造上、どうしても検査結果をもとに『今できないものをどうすればできるようになるか』という思考が生じたり、『できるものを増やす=発達』という感覚を持つことにつながってしまう気がします。

では、どうすればよいのでしょうか。「この検査結果はあくまでも子の発達の一側面だ」と説明したり、「できるようになることが目的ではなく、まずは今の発達状態によりよく過ごせる環境を作りましょう」と方向づける、などの対応が考えられるでしょう。この対応は妥当ですし、現状これくらいしか仕様がない、という気もしますが、何となく気休めや根拠の薄い励ましをしているような後ろめたさを感じることもあります。

子どもの発達支援の中で目指すべき方向は何でしょうか。執筆者短信にも書いたのですが、先月にたまたまフランスに行き、児童福祉を学ぶ機会を得たのですが、その事前学習の中で聞いた世界人権宣言についての話はそのヒントになるように思いました。

世界人権宣言の第26条には教育の目的に関する記述があり、原典（英語）では「Education shall be directed to the full development of the human personality and …」という記述になっていました。日本語訳では「教育は人格の完全な発展ならびに…を目的としなければならない」となります。邦訳としては正確なのだと思いますが、「人格の完全な発展」って何?という気もしますし、何を持ってそれが達成されたとするのかも曖昧で、単に理念を掲げたものとも思えます。一方、フランス語訳は少しニュアンスが異なるようで、そのフランス語を邦訳すると「教育はその人らしさが開花することならびに…」となるそうです。次々とできることを増やすのではなく、その子どもがその子らしく育ち、自分の花を咲かせること。それを教育や発達支援で目指すことができれば、縛られた発達観、成長観を脱することができるかもしれません。